



日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第十八卷

河出書房版

現代理本小說大系 第十八卷

昭和二十五年十二月十日 初版印刷
昭和二十五年十二月十五日 初版發行

代著者 高濱 虛子

發行者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
河出 孝雄

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日本近代文學研究會

編集者 中野 重治

印刷者 東京都文京區久堅町一〇八番地
大橋 芳雄

發行所

東京都千代田區 株式會社
神田小川町三八

河出 書房

會員番號A二一〇一四番
電話神田(25)三一七四番

共印株式會社印刷

目 次

高濱虛子

俳諧師

三

伊藤左千夫

野菊の墓

八一

長塚節

土

一五

解説（中野重治）

三九

高濱虛子

俳諧師

明治二十四年三月^が嶺和三藏は伊豫尋常中學校を卒業した。

三藏は四年級迄忠實な學校科目の勉強家で試験の成績に第一位を占める事が唯一の希望であつた。それがどういふものか此一年程前より試験前の勉強は一切止めた。この卒業試験前は近松の世話淨瑠璃を讀破した。試験の答案は誰よりも早く出して残つた時間は控室で早稲田文學と^{しんぶん}柵草紙の沒理想論を反覆して精讀した。

三藏の父は竹刀を^{たて}提げて中國九州を武者修行に廻つて廢藩後も道場を開いて子弟を教育したといふ武骨一片の老人で、三藏は其の老後の子であつたに拘らず家庭の教育は非常に嚴格であつた。「三藏炭取を持つて來い。」といふ聲にも「やつ。」と竹刀を握つて立合つた時の氣魄が籠つてゐるので、三藏は覺えず言下に「はい。」と蹴起せねばならぬやうになる。「三藏此手紙を高木へ持つて行てくれぬか。」といふ聲はゆつたりしてゐるが三藏は其手紙を受取るや否や下駄を突掛けて駈け出さねばならぬほど其聲に威嚴がある。さうして其謹嚴な半面には又他愛も無い愛情がある。三藏が中學校に這入つて後迄も、外出して歸つた父の袂からは紙にくるんだ煎餅位のお土産が出ぬ事は稀であつた。父が亡なつてからも同じく嚴肅な兄の膝下に保管されて、さうして際限も無い老母の愛に甘や

かされた。三藏は人に對して極めて柔順で素直で氣が弱くつて、さうして何處か我儘で敗嫌で、虛榮心の強い性質に育て上げられた。

兄は「金儲けには醫者がいいよ、醫者にならぬか。」と勧めた。三四年前或寺を借りて毎月演説會をした仲間は「君は政治家になる筈では無かつたのか。」といった。三藏は醫者は思ひもよらぬ、金なんか儲けなくつてもよいと思つた。政治家は初め其の花やかな點が心を牽いたが、後になつて「雪中梅」や「佳人の奇遇」で想像してゐたのとは違つてゐる事がわかつて來て政治家も面白くないと思つた。かくて三藏は文學者と決心した。文學は束縛の少ない自由の天地である上に又政治について花やかな天地である事も三藏の心を牽いた一つの原因であつた。

松山一の老櫻のある料理屋に同窓生の祝賀會が開かれる。御詠歌の上手な同窓生の一人が『普陀落や岸うつ波』と茶碗を箸で叩いて唄ふと、小さいおもちやの傘と、これも杉箸を杖の代りに持つてをばさんと仇名のある滑稽家の栗田が妙な身振りをして『順禮に御報捨』と可愛らしい聲を出す。こゝまでは趣向が出来たが『今日は幸ひ夫の命日、お手のうち進ませう』といふ塗盆を持つて立つて行く役割に當るものがない人も無い。三藏は乾いた口を開けて「僕がやらう。」といふ。「君が遣るか。」と栗田が眞面目な顔をして驚く。茶碗が

鳴る。「普陀落や岸うっ波」と唄ふ聲が響く。をばさんは目をしよば／＼させ乍ら首をかしぎ『順禮に御報捨』と絲のやうな聲を長く引つ張つてゐる。いざとなると三藏は喉が詰つて口がきけぬ。をばさんは又『順禮に御報捨』と改めていふ。三藏はまだ黙つてゐる。「馬鹿！」といふものがある。「自分で遣うといはねばいゝのだ。」といふものがある。餘興は其のまゝにつぶれて三藏は面目を失ふ。

ばつと咲いた櫻はばつと散る。蚊いぶしの煙の中で三藏は露伴の「風流佛」を愛讀する。

二

瀬戸内海の波は静かだ。夢のやうに寄せて音も無く白砂の上を走る。只時々囁く如く聞ゆるのは渚に捨てゝある碇にあつて碎くる波の響きであらう。堅田の浦の汀の石に立つて近江の湖を見た時と、三津の濱の捨舟の端に腰打ち掛けて瀬戸内海を眺めた時といづれを湖いづれを海と見定めがつかう。其三津の濱に門司を出た汽船が著く。一日に一度著くこともある。二度著くこともある。舢舨は旅客と行李を積んで汽船に運ぶ。汽船は其静かな鏡の面に渦を巻いて大阪に向ふ。

四年間一番の席を獨占して卒業する時も一番であつた中尾市太郎は藝者屋の息子である。市太郎の姉二人とも藝者をしてゐる。一人の妹も藝者をしてゐる。姉妹の稼いだ金は市太

郎の教科書となり制服となり月謝となり、其月桂冠となり、さうして又東京の高等工業學校を志望して上京する其學費となり旅費となる。三津の濱の波打際に立つてゐるのは、沖遠き雲の峰に打映えて赤、紫、淺黄の三本の蝙蝠傘、少し離れて大小いろ／＼の麥藁帽。其中には三藏もゐる、三藏を轢落して二番になつた加藤もゐる、四番の平田もゐる、をばさんもゐる。中尾も加藤も平田もをばさんも新らしい活動の世界を波の彼方に描く。中尾は甲板で帽子を振る。勝つて歸るよと帽子を振る。加藤も平田もをばさんも帽子を振る。勝つて歸り給へと帽子を振る。紫、淺黄、赤の三本の蝙蝠傘からも眞白き手に各々ハンケチを振る。勝つてお歸りよとハンケチを振る。三藏は獨り目をねむつて解放の世界を波の彼方に描く、中尾の振る帽子、加藤、平田、をばさんの振る帽子、三人の姉妹の振るハンケチを見て三藏も亦知らず識らず帽子を振る。而も勝つて歸り給へといつては振らぬ。負けて歸り給へといつて振るのでも無い。三藏はたゞ帽子を振る。中尾が振つてゐる間振る。加藤、平田、をばさんが振つてゐる間振る。三人の姉妹が振つてゐる間振る。

中尾につゞいて誰彼が出發する。三藏の家の庭の向日葵が一度廻ると三津の濱に二艘の汽船が著いて三藏は一冊の小説を讀み終る。八月に入つてからは自ら筆を取つて書く。主人公は大江山の麓の村から離縁になつて歸つて來たといふ自分

の家の西隣の家の娘で、一枚書いては消し二枚書いては消し十枚にならぬうちに筆を中止する。三藏の愛讀する「風流佛」の作者露伴は二十一歳で「露園々」を處女作として出した。二十一歳迄には處女作を出さねばならぬと考へる。

大阪商船會社の緑川丸が、三藏、加藤、平田、をばさん等の一行を神戸に送り、汽車が更らに是れを京都に送つたのは、四條の磧にまだ川床が残つてゐて枝豆賣の赤い提灯が篝火の中を縫つて歩く八月の末であつた。

三

三藏が朝顔の花と夕顔の花の間に立つて、故郷の垣根から自分の未來に首を延して何か判らぬものに望みをかけてゐた時は、目の前にばつと蛤の口から出た蜃氣樓のやうなものが棚引いて其中に畫の如き京都があつた。

扱て今は親しく其京都の土を踏んで七條の停車場からガラガラと車にゆられて、三藏等より一年先に卒業して既に高等學校に在學してゐる先輩の上長者町の下宿に著く。加藤も平田もをばさんも著く。其下宿といふのは全くの素人屋で、明治三十四五年頃は吉田町の専門の下宿屋でも一ヶ月三圓五十錢、それで十二疊の大廣間を一人で占領してゐるやうな時代であつたので、一ヶ月炭油共に三圓といふ安直下宿に先輩は古びた神棚の下に易者のやうな顔をして机の前に坐つてゐ

た。尤も是は一人の先輩で、他の一人の先輩は其向ひの、これも素人屋で姉小路といふ、昔は御所勤めをしてゐて今でも「~~ズ~~綾子だといふ四十七八の顔に白粉をこて／＼と塗つた、べら／＼べら／＼と口中を泡だらけにして喋舌り立てる其綾子さんの監督の下に赤い机掛を掛けてチヨコナンと坐つてゐた。三藏一行の所置は萬事此二先輩に依屬してあつたので、二先輩は彼方へ行き此方へ行き今更のやうに兩家の主人公と談判を始めてゐる。

加藤も平田もをばさんも神棚よりは寧ろ Miss 綾子の方に心を傾けて、めい／＼行李の中から出した菓子折を一つ宛持つて行つて敬意を表する。三藏も同じく行李の中から一つの菓子折を取り出して遅れ走せながら敬意を表する。綾子の方は相好を崩して喜ばれつゝ「狭うてもだんないのならいくたりなりとお出でやす。奥村さんへもちとお行さんと悪いさかいに其處はあんじよう此方で話極めます。心配せんときやす。」といふやうな事をいはれる。

纏て談判の結果、加藤、平田、をばさんの三人は首尾好く綾子の方の家と極つて、三藏獨り奥村と定まる。實はをばさんも奥村の方であつたのを「あら、私や厭やよ、泣こかしらん。」といふやうなことを言つて旨く交渉をつけたのである。

三藏は行李に免れて、古ぼけた障子を眺めて、國を出づる時門に倚つて自分を見送つた老母の白髪を思ひ浮かべる。先輩

増田とは見ると相變らず神棚の下の薄暗い机の前に坐つて、長煙管を詰めながら、目は机上の日出新聞の上に落としてニヤ／＼と笑ひながら讀んで居る。

増田と共に臺所の前に竝べてあるお膳の前にかしこまつてお碗の蓋を開けると、中には松葉昆布に小さい椎茸が一つ這入つてゐる。其他は皿に砂の如くこまかく刻んだ菜漬が一つまみ入れてあるばかりで御飯も針のやうに硬い。

四

翌日加藤、平田、をばさん一行が、高等學校を見に行かうと三藏を誘ひに来る。嚮導者は綾子さんの方にゐる先輩山本で、増田にも行かぬかと勧めたが「山本が居ればいゝだらう、行つて來給へ。」と相變らず長煙管に煙草を詰め乍ら神棚の下の暗い机の前に坐つてゐる。山本は此處が御所だ此處が丸太橋だ、彼處が下加茂で、糺森があれだと一々教へて呉れる。三藏も加藤も平田もをばさんも只感心してふん／＼と聽いてゐる。

三藏は國を出てから落着かぬ。緑川丸の甲板で加藤等と舳の碇綱に腰を掛けて、來島の瀬戸を越えてから穩か過ぎる程穩かな航海に退屈して各未來の希望を語り合つた時は、加藤は加藤、平田は平田、をばさんはをばさん、三藏は三藏とチヤンとめい／＼の方向は坦途の如く明かて、一舉手一投足も

各々意味あるが如く他を見自己を解釋してゐたのであるが、扱て播磨灘の夢覺めて汽船が神戸についてからは、加藤も無い平田も無いをばさんも無い三藏も無い。孰れも只周囲の勢力に制せられて殆ど無我夢中で今日迄來た。鴨川堤を離れて吉田町に曲りかけた時、三藏は漸く我に歸つたやうな顔をして「山本君、叡山はどの山かい。」と聞いた。「叡山かい、叡山はそれさ。」と山本は頷て東北隅に聳えてゐる山を指した。「あれが叡山か。」と三藏は感心する。國に居て夢想してゐた京都と、現在踏んで居る京都とは今迄全く別のものであつたのが此時漸く一つのものにならうとする。而も今見る叡山はたゞの山だ。五色の土で作上げてゐた腦中の山とは色も違ふ形も違ふ。びたりと一つにならうとして一度は接近したものの容易には一つにならぬ。又「鞍馬はどれかい。」と聞く。「鞍馬かい、鞍馬はあれさ。」と今度は左の手を上げて北方の山脈の中に稍高くなつてゐる一峰をさす。「あれが鞍馬か。」と三藏は又感心する。加藤や平田は此問答には無關係で「行軍は何泊位かい。」「演説會は各級は一人づゝかい。教師から指名するの？生徒から志望するの？」などゝ各々質問を發してゐる。三藏は又是等の問答には無關係で「愛宕はどれかい。」と同じやうな質問を繰返へす。「愛宕かい。」と山本は面倒さうに言つて「此處からは御所の森の蔭になつて見えん。」と素氣なくいふ。「さうかい。それではもつと向うへ行

つたら見えるね。」と三藏は執拗く聞く。「えい」と山本はうるさうに振り向いて、其拍子に、「あゝ見え出した見え出した。それ、あの森の外れに見える尖った山さ。」と西方の天を指す。京都の三つの高山は此に於て三藏の頭に深く印象される。其れと同時に一つにならうとして容易に一つにならなかつた理想と現實の二つの京都の、一方の色がだんだん薄くなつて来て、他の一つの色がだん／＼と濃くなつて来て、昨日下りた七條の停車場から、上長者町、御所、鴨川、其れに此の三つの山を結びつけた方の京都、其のまぎ／＼とした現實の京都が三藏の鼻の尖にぶら下る。

五

赤い煉瓦の建物、是も現實の高等學校が又目の前に横はる。嘗て寫眞で見てどんなに立派なものであらうかと想像してゐた程では無かつたが、それでも門前に立つて見ると流石に大きい。山本が無造作に這入りかけるので「這入つても構はんのかい。」と三藏は一寸躊躇する。制服に制帽を著けた一人の生徒が三藏等には一瞬をも呉れずについて門を出て行つてしまふ。「構ふものか。這入りたまへ。」といつて山本は先きに立つ。

生徒の控室には二月許り前に出した掲示が其儘になつてゐる。『加納教授本日休み』『豫料一年甲組金曜時間割左の通り

順序變更、三角、體操、物理、阪本英語、獨逸文法』それから又『本科一年乙組來話會第三土曜橫斜亭にて開會、幹事』『高知縣人會、今週金曜午後三時より、吉村方にて』『理事改選左の通り更任、平泉八郎、末松道雄、遠山武、擊劍部』などいふ張出しも其處に残つてゐる。加藤や平田やをば、さんは面白さうに其れを見てゐる。彼等が三津の波打際に立つて波の彼方に想像してゐた活動競争の舞臺が今日の前に現前してゐるのである。今控室には三藏等一行の外一人の人影も無い。廣い建物が寂寞としてゐる。けれども二月許り前に過ぎ去つた競争活動の足竝の音が是等の掲示を通して遠き彼方に響くのが聞えるのである。纏て又數日ならぬうちに新しい競争活動の潮が推寄せて来る其響をも是等の掲示を通して聴き取ることが出来るのである。三人の顔には若い血が漲り輝く。

獨り三藏は何處となく一種の壓迫を感じる。嘗て目をねむつて心で見た其理想郷も今日の前に現前して見ると、矢張り束縛の多い壓力の強い競争激甚の社會であるらしい。彼は昨日下宿の競争で眞先に敗北して、今此の控室に立つて既に堪へ難き壓迫を感じる。三藏の顔には濕ひが無い。す／＼と山本のあとについて其日は吉田町から東山一帯を散歩して草臥れて上長者町の宿に歸る。

三藏は其後一年間、束縛の多い學制の下に、自由の境界を夢想し乍ら絶えず絶えず壓迫を感じてゐた。其一年後の成績

は六十幾番といふのであつた。加藤、平田、をばさん等とは各々志望する學科が違つてゐたが、加藤は十番以内、平田は二十番以内、三藏の眼中になかつたをばさんですら三藏よりは成績が善かつた。三藏は加藤や平田やをばさんに逢ふのすら厭ふやうになつた。

三藏の俳諧的生涯は此後に始まる。こゝに其一年間に於ける出來事の一を陳べる。

六

明治二十四年の秋の末の出來事一つ。

お向うの姉小路では綾子の方が朝から晩迄のべつ幕なしに喋舌るので、勉強家の加藤や平田は居たまれずなつて轉宿してしまつた。從來から居た先輩の山本とをばさんとが綾子の方に生花を習つてゐるといふ其秋の初頃、奥村のうちでは増田は相變らず神棚の下に坐つて、此頃は長煙管に煙草を詰めながら妙に首を傾けて物案じをしてゐる事が多い。さうして時々ニヤ／＼と齒をむき出して笑ふかと思ふと長煙管を突き出してボンと遠方の火鉢にはたいて、大きな煙の棒を兩方の鼻の穴から出しながら筆を取つて紙に向つて何やら書く。三藏が「増田君何をしてゐるのかい。」と聞いても増田は黙つてゐる。

又此頃増田のところへ遊びに來る二十四五の商賣人らしい

男が一人居る。頭を丁寧に分けた角い帶を締めた男で、其男が來ると増田は例の物案じを始める。其男も亦物案じを始める。二人で手を拱いたり、天井を仰いだり、口を開けたり、鼻の上をさすつたりなどして無言である。さうして増田は相變らず時々ニヤ／＼と笑つて紙に何か書きつける。其男も亦手帳を出して鉛筆で何か書きとめる。それから其物案じがすむと碌々話もせず其男は歸つてしまふ。時としては毎日のやうに來る、少くとも一週間に一度は來る。二人で散歩などに出る事もある。

或時増田の留守の時其男が來た。それから三藏と十分許り話をして歸つた。京都辯の穩かに物をいふ人で、此頃は時候が善いから嵯峨野あたりへ散歩に行つたら善からう、あまり勉強して體を傷はぬやうにしる、などいつて歸つた。三藏はなつかしい親切な人だと思つた。それから増田と一緒に何をやつてゐるのかと聞いたら、何詰らぬ事だと笑つて、俳句ですといつた。俳句とは聞きかへすと、發句の事ですと説明した。それで三藏は増田の物案じは發句を作るので、此男は發句友達だといふ事を初めて了解した。

秋の末になつてからであつた。其男が二週間許り來なかつた。さうして或日増田が例の神棚の下に坐つて驚いたやうな顔をしてゐる處へ三藏が歸つて來た。それから増田は斯んな話を三藏にした。「あの男ね、よく僕のところへ來た。あれ

は君俳句の好きな男でね、同好者が五六人ある。其中でも最も熱心な男であつたのだ。句作も上手であつてね、趣味もよく解つてゐた。それにあの男が昨日捕まつたのだ。驚いた事にはあれが拘捕であつたのだ。しかも當局者間では有名な拘捕ださうだ。それで僕等仲間の者には少しの損害も與へ無かつたばかりか、親切ないゝ男であつた。拘捕にあんな風流心があるとは驚いた。それにも一つ面白い事は、東京の新聞に此頃俳句の出でゐるのがあるがね、七條の停車場に置いてある其新聞の俳句が此二三ヶ月必ず切り抜いてある。誰の仕業か餘程氣を著けてゐても判らなかつた。ところがそれが矢張りあの男であつたさうな。あの男の俳號かい。卜翁といふのさ。」と重たい口を開けていつに無く熱心に話した。此時は齒をむき出して笑ひもしなかつた。

それから増田が物案じをすることも稀になつた。熱心な友を失つて少し氣抜けがしたのであらう。三藏は松山に居る頃故人五百題は見た事があつた。けれども發句にはたいした興味が無かつた。獨逸の文法に苦しめられつゝあつた此頃は小説の事もあまり深く考へなかつた。まして俳句の事などは此時はまだあまり意にも留めなかつた。三藏は妙な人があるものだたと卜翁といふ人を不思議に思つて、あの親切さうな穩かな人が有名な拘捕かと、其人が俳人であるといふ事よりも其方が寧ろ強く心を牽いた。

七

二十五年冬(一月)の出來事一つ。

うとくしてゐた耳で時計の音を數へる。七、八と途中から數へ始めて九、十、十一、十二、十三、十四と際限も無く鳴る。十五、十六と數へてしまつて、何の事だ、まだちつとも眠つてはゐなかつたと思つたのに、うとくとして居たのだな、と初めて氣がつく。大方今のは十二時であつたらう。此頃どうも寢つきが悪くて困る。きのふ加藤に學校で逢つたら、君此頃大變顔色が悪いよ、ちと鐵棒にてもぶら下つたらどうかといつた。あすは日曜だから一つ散歩に出掛けうか。散歩なら何處に行かうか。東山はもう二三度行つたし、西山の方も卜翁にすゝめられて一度行つたし、行くのなら北山の方へ出掛けうか。馬鹿に寒いやうだが雪にてもならねばよいかと、三藏は蒲團を頭から被つて縮かまつた。時計のきちきちいふ音も遠くなつたと思ふうち一時の鳴るのは聴かずに寢た。

翌朝寢坊をして起ると、今朝迄まだ降つてをつたといふ雪が霽れて、午前九時頃の日が日當りの悪い座敷の一枚の障子に半分ばかり當つてゐた。三藏は朝飯を濟ませて、行李の中から松山から持つて來てまだ一度も締めなかつた脚絆を出して締めて、草鞋を一足買つて穿く。

それから雪を踏んで出町橋を渡つて鴨川傳ひを北へ取つて、山端を過ぎて八瀬を過り大原の里へ行く。京都の市中で見ると大原女より此八瀬大原で見る大原女の方がなつかしいやうに思はれる。去年の秋嵯峨を散歩した時も斯ういふ時に發句でも作れたら面白いだらうと卜翁を思ひ出したが、此日も亦た思ひ出す。其後増田の話してはあの卜翁はもと静岡の男であつたのが東京にも暫く居つたので、其時分發句を作り覚えて、それから京都へ来て、寧ろ卜翁が中心になつて五六の同好者が出来た位であつたのだとの事であつた。三藏は、それにしてはあの言葉つきが全く京都人らしく聞えたのが不思議だといつたら、増田は、又あれで江戸詞も大變旨いさうだよといつた。そんな事を三藏は思ひ出しつゝ足に任せて歩く。頭に黒木や風呂敷やいろ／＼なものを載せて續々と大原女が来る中に、角に赤や黄ろい木綿を巻きつけた美しい牛も澤山来る。

三藏は東山を散歩した時は勿論、此秋西山へ出掛けた時もいゝ心持はしたが、それでも今日のやうな心持はしなかつた。今日は何だかのかんひりした生れ更つたやうな心持がする。何故だらうと三藏は考へた。尋中を卒業した當時の心持も餘程ゆつたりしてゐたが、其時とは又大變趣が違ふ。時計を出して見ると十二時を過ぎてゐる。朝飯を食つてまだたいした時間を経たぬのにもう空腹を覚える。三藏は掛茶屋に腰を掛け

て握飯を取り出して食ふ。叡山は隆起した背中を三藏の方に向けてゐる。三藏は其の大きな叡山の麓の小さな掛茶屋の床几に自分は今腰かけてゐるので、叡山の大に比べると自分は今豆人形の様に小さいと思ふと、一種の悲しいやうな快感が腹の底から湧き起つて来る。さう思つて手にしてゐる白い握飯を見ると、此處から見た叡山と同じやうな三角形をしてゐる握飯の、白い上にも眞白い米の粒々として相重なつてゐるのが涙が零れるやうに面白い。三藏は暫くそれを眺めてゐて、其飯の白いのにも負けぬ白い齒を徐ろに其一角に當てる。水のやうな冷たさがちつと其齒に浸みる。

擲げ出した草鞋の爪尖を小さい川が流れてゐる。岸の枯草には雪が積つてゐて汀には氷が張つてゐる。三藏は又此の川に沿うて流るゝ時の悠遠を想うて、此狭い山間に歴史が印した足跡を繰る。

「寂光院はまだ遠いですか。」と三藏は茶店の婆さんを顧みる。

「寂光院さんですか。もうすぐです。その橋をお渡りやしたら、小さい徑が分れとりますさかい、其處を右へお出てやすとお寺があります。其れが寂光院さんです。」と婆さんは答へる。

八

寂光院の門はひたと鎖してある。戸の透間から内を覗いて

見ると、庭一面の雪で、木の根や石の上から丸く持上つた雪が他の木の根石の下までふつくらと積つてゐて、たゞ其木の葉の尖から落ちた雪が點々と其上に少しの痕をとめてゐるばかりである。加茂川堤から八瀬大原に這入つてからも、ただところ／＼に僅の雪が消え残つてゐたばかりであつたのに、今渡つた小川の板橋から此門に來るまでの徑も草鞋を埋むるほどの雪があつたし、更に此戸の透間から見ゆる庭の雪は一層の深さのやうに見える。彼の板橋を第一の關門とし、此山門を第二の關門として雪の深さを増してゐるやうに見える。四邊は寂寞として靜かだ。耳を澄すと僅に木魚の音が聞える。三藏は暫く黙つて其木魚の音を聽いてゐたが、寒さが足の尖迄浸み渡るやうに覺えた。寂光院は尼寺の筈だ。人の世に背いた尼が人の世に柵を隔て門を鎖して、斯る寒き雪の日をも行ひ澄してゐるのかと思はれた。木魚の音は靜かに響く。三藏は終に戸の透きに口を當てゝ案内を請うた。

「御免。」「頼みます。」「と幾度呼んでも返辭が無い。木魚の音が尙靜かに聞える。三藏は此まゝ引き返さうかと思つたが、終に握り拳を戸に當てゝ叩いた。初めは輕く叩く。返辭が無い。終には烈しく叩く。まだ返辭が無い。朽ちた戸の碎けよとばかり叩く。

木魚の音が止んだ。三藏は又叩く。木魚の音が又響き始めたと思ふと他にも幽かなる物音が聞える。耳を澄ますと人の

けはひである。程なく細目に開けた雨戸の透きに尼の白衣がほのめいて「どなたです。」といふ。三藏は戸の節穴に口をつけて「私は學生ですが、どうかお寺を拜まして下さいませぬか。」といふ。雨戸は開いたまゝで尼の姿は隠れる。木魚の音が又止む。暫くして木魚の音が又響き始めたと思ふと今度は下駄の音が内玄關の方に聞えて、やがて其處の戸が開く。朽戸を開けた尼は十七八の見にくく、無い顔立である。黙つたまゝで三藏を導く。其白衣も其白足袋も雪に映えて汚れ目が目立つて見える。三藏は其後姿を見て、殊に背の低い、丸めた頭の形の稍々いびつなのを目を留めて哀れに思ふ。尼は急に後ろを振返つて「石の上をお歩きやす。」といふ。雪は飛石をも隠して積つてゐる。けれども尼の足駄の痕が無慙に雪を踏みにじつて其處を飛石といふ事を明かにしてゐる。三藏は其尼の足痕を歩く。

九

三藏は内玄關の上り口に腰を掛けた。かじかんだ手で草鞋の紐を解く。尼が汲んで來て呉れた古盥の底の方に僅かばかりある水に足をつける。突然後ろから一條の水が盥の中に落ちる。三藏は驚いて見上げると、鐵瓶の口から沸つた湯が盥の中に注がれてゐるのであつて、彼の尼が黙つて後ろに立つて居る。冷たい雪の中に暫く立ちすくんで、今は又其雪より

冷たい水の中に足を浸けて、尙其邊の空氣の冷え切つてゐる中に、一條の熱湯が湯氣を棚引かせながら鐵瓶の口から出てゐるのは、牢獄の壁から洩れる一點の日の光りよりも此場合三藏に取つてなつかしいものであつた。三藏が見上げた時の尼の顔は先きに戸を開けてくれた時よりは愈かに美しかつた。それに先きに三藏が見にくく哀れに思つた背の低いのも頭のいびつなのも此時は目に立たぬ。三藏は思はぬ賜物に少し狼狽へて「もう結構です、水で結構です。」と早口に辭退した。尼は無造作に「さうですか。」とすぐ鐵瓶の湯を止めてさつさと臺所の方へ行つてしまつた。

再び出て來た尼は先に立つて三藏を導く。先づ本尊の前に立つて「本尊は阿彌陀如來、聖德太子の御作」と説明する。金閣や銀閣の小僧がする棒讀みのやうな説明とも違ふが、其言葉のうちには何の暖か味も無い。さつきにから時々耳に入つてをつた木魚の音は今直ぐ目の前に聞える。暗い小さい禮盤の前に七十許りとも見ゆる小さい尼が、首を前に垂れて猫背を後ろに突き出して、口のうちでは殆ど聴き取れ難いやうな讀經をしてゐる。懶い目で一寸三藏を振り返つて見たが、すぐ又正面を向いて讀經を續ける。若い尼はこちらへと導く。佛壇の中に二體の像がある。其一つは建禮門院の御像、他の一つは阿波の内侍の像、茶色の法衣に當る處にも蟲の穴が澤山見えるが、胡粉で塗つてある。汚れてゐ乍らも白く拜ま

る、御顔にもところ／＼に蟲の穴がある。「女院が御手づから張らせられる張子の御像。」と説明する阿波の内侍の像は、顔は少し赤味を帯びて木像の背は女院のよりも低く見える。三藏は源平盛衰記で讀んだ大原御幸、國に居た時耳にした事のある諸曲の大原御幸の文句が入り交りて思ひ出さる。先に内支關て感じた空氣の冷たさ、其れと同じやうな空氣の冷たさを先きの本堂でも感じ今又此室でも感じる。人の世を橋にて隔て門を鎖ちて隔てた此深雪の中の寂光院には人の世の暖か味は先の鐵瓶の湯の外には何物も無い。

ふと見ると尼は右の脚が痛むのであらう兩手で壓へて顔を擧めてゐる。三藏は「どうかしましたか。」と優しく尋ねたが尼は其言葉を有難く思ふやうな風も見えず「リヨウマチどつしやらう。」と餘所／＼しくいつて「しやうが無い。」と打棄つたやうな獨り言をいふ。

十

尼は今開け差した雨戸に凭れて三藏の傍に立つ。兩手を雨戸の上に重ねて其上に頬を載せて、痛む右脚を少し浮かせて三藏の見る庭面を只茫然と見てゐる。若しこれが緑の長き髪を束ね美しき衣を着てゐる俗世の娘であるならば、斯る姿勢は寧ろ妖艶に過ぐる程のものであらう。而もいびつな頭に汚れたる白衣、其れに背に負ふ帶も無い爲めに低い背が愈々低

く見える此の比丘尼には何の色氣も艶氣もない。

三藏は謠曲大原御幸の文句を胸のうちに繰る『池の萍波にゆられて』とある池はと見ると、只雪ばかりの庭の面にも少し低くまつた處があるのを大方それであらうと考へる。『岸の山吹咲き亂れ』とか『汀の櫻散り敷きて』とか『青柳絲を亂し』とかある晩春初夏の景色は此落葉たる雪の中で固より想像することは出来ぬ。『一字の御堂あり、薨破れては霧不斷の香を焚き』とある其御堂は麴て此古寺かと思ふと、其中に斯く立つて居る自分や尼の姿が顯みられる。三藏は曩に玄關で美しと見た尼の顔を今は軒淺く、殊に雪の上を這つて來る明るい光りて高からぬ鼻薄い眉や、大きな口光澤の無い皮膚等をあらはに見て最早美しいとは思はなかつた。『賤が妻木の斧の音、梢の嵐猿の聲』とあり『女院は上の山へ花摘に御出にて』とある後ろの山はと三藏は右手に柱を握つて體を前に延ばす。白く雪を載せてゐる百姓家の屋根の上にこれもまだらに雪をいたゞいた山が見える。『花筐腋にかけさせたまふは』とある女院の其山の唄傳ひに下り來るところを想像して見ると哀れにも靜かな景色である。

尼は雨戸を締めて三藏が聊の志を紙に包んで渡すのを受取つて臺所の方へ行く。麴て『餅が焦げてまつせ。』と言ふ聲がする。『さうですか。かやしておくれやしたか。おほきに。』といふのは他の尼の聲だ。

三藏は草鞋を穿く。尼は後ろに立つて淋しく見送る。三藏が玄關を出ようとする時幽かに餅の焦げる匂ひがする。

三藏は彼の朽ちた門を出て、雪の細道を歩いて、彼の小川の板橋を渡つて、其から又寂光院を顧みた。古き物語のあと、古寺を訪うて三藏の頭にしみ／＼と残つたものは彼の若き尼と鐵瓶の湯と餅の焦げる匂ひと、それに今一つ彼の木魚を叩きつゝあつた猫背の老尼の三藏を振返つた懶い目とであつた。

三藏は其翌日三角の宿題をやらされて一時間黒板の前で立往生をした。

十一

二十五年初夏の出来事一つ。

或夕暮三藏は京極から四條の方へ散歩に行つた。三藏は時買物に寺町へ行く事はあるが京極へは滅多に行く事はなかつた。京極の錦魚亭でたゞ一度善哉を食つたのももう大分前の事である。三藏は今宵珍らしく獨りてぼつ／＼と京極を歩く。大變な人出て『お道入りやうす。』と言ふ寄席の呼聲も人の呼吸でむれたやうな中から響く。三藏は人に行き逢つて立止まつたり、後ろから來る男に肩で押し除けられたり乍ら歩く。どういふ譯だか今宵は一種の暖か味を覺える。此雜沓が少しも癪に障らぬばかりか目に入るものが皆一種の好意を